魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

czhs

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　一途な思い

【Ｎコード】

Ｎ０２５１Ｚ

【作者名】

ｃｚｈｓ

【あらすじ】

八神はやてが率いる新部隊その名を機動六課。この出来て二日目の部隊に異動してくる一人の魔導士がいた。これは機動六課と一人の魔導士が織り成す物語。

始まり（前書き）

初めまして『ｃｚｈｓ』と申します。ド素人なので温かい目で見て頂けたら幸いです。

始まり

はやてｓｉｄｅ

はやてとリインはある書類を見ていた。
「まさかあの人が来てくれるとは思ってなかったわ～リンディさんに頼み込んだかいがあったちゅうもんや！」
「誰なんですかその人って？」
「うちやなのはちゃんそれにフェイトちゃんが前からお世話になっとる人や。ここ最近おうてへんから会うのが楽しみやわ～♪」

二人が話してしるとドアをノックし二人の人物が部屋に入ってきた。
「はやてちゃん急に呼び出しなんて何かあったの？」
はやてに話しかける人物、栗色の髪をサイドポニーにして教導管の制服に身を包む管理局のエースオブエース、高町なのはだ。

「実はな今日他のところから異動してくる人がおるんよ。二人も知っとる人やから教えとこうと思ってな」
「私達も知ってる人？」

はやての言葉に首を傾げる金髪の女性。黒い執務管の制服に身を包んだフェイト・Ｔ・ハラウオンだ。
「せや、これがその人に関する書類や」

二人は書類を見ると同時に驚きと嬉しさのあまり声をあげた。

「えええぇぇ！！！優君が来るの！？」
「優が一緒ってことは…四人揃うのは三年ぶりだね♪」

「そうなんよ、はぁ～はやく来てくれへんかな～」

優ｓｉｄｅ

「ここが機動六課か…金使い過ぎだろ」

『まぁ新築ですらね。それよりマスターあまり時間がありませんよ』

「そうだなありがとなアイリス」

『どういたしまして』

俺こと如月優と相棒のアイリスは六課の校舎前にいた。三日前にリンディさんにいきなり異動させられたのだ。それも拒否権なしにな

「アイツらと再び会うことになるなんてな…これもリンディさんの策略かなんかなのか？」

『策略かどうかはわかりませんが少なくともあの人に限って悪意があってやった事ではないと思います』

「そうだな……さてと行くか」

ｎｅｘｔ

出向（前書き）

二話目です。やっぱ小説書くのって難しいですね……

出向

優ｓｉｄｅ

「中に入ったはいいが部隊長室ってどこだ？」

『私に聞かれましても…』

「だよな～」

こんな感じで俺達は六課の校舎内をさ迷っていた。受付の人が居なかったからまぁしかたがないと思い自力で探していたんたが、一向に見つからない

「それに誰にも会わないとは…」

溜め息をついていると前から青髪とオレンジ髪の子達が歩いてきた。ちょうどいいから聞いてみるか

「ちょっといいかい？」

「はい、何でしょうか？」

青髪の方が聞てくる

「部隊長室がどこにあるか教えてくれないか？」

「失礼ですが、どちら様ですか？」

今度はオレンジ髪の方が聞いてくる

「おっと名乗ってなかったな。俺は如月優一等空尉、本日から機動六課に異動して来た者だ」

「！？失礼いたしました。ティアナ＝ランスター二等陸士です」
「スバル＝ナカジマ二等陸士です」
「よろしくなティアナ、スバル」
「はい、では案内させて頂きます」

三人は部隊長室に向かった

はやてｓｉｄｅ

「優君と直接会うのは二年ぶりやな～今度どっかに連れてってもらおうかな♪」
「だめだよはやてちゃん、連れてってもらうのは私なんだから！」
「二人共、何言ってるの？優は私と出かけるんだよ！」
そんな事を言っているとティアナから通信がはいった。

〈失礼します、如月一等空尉をお連れしました〉

「わかった、ありがとな」

〈いえ、それでは〉

通信が切れるとドアをノックして優君が入ってきた

「失礼します、本日より機動六課に出向します如月優一等空尉です。一年間よろしくお願いします」
「機動六課部隊長の八神はやてです。六課はあなたを歓迎します。」
お互い敬礼し握手をする
「さて、堅苦しいのはしまいや。久しぶりやね優君♪」

「これからよろしくね優君♪」
「よろしく優♪」
「久しぶりだなはやて、なのは、フェイト！」
next

思い（前書き）

三話目です。そういえば主人公の容姿について書いてなかったような……

思い

優達は軽く挨拶をした後、今後の事について話し合っていた。
「俺は何をすればいいんだ？」
「優君にはなのはちゃんとフェイトちゃんの補佐役かつ六課の副部隊長をしてもらうつもりや」
「つまり三人の付き人ってことなるのか？」
「まぁそんな感じや！」

話を聞き終えると優は少し俯き考えこんでいた。
地上本部からの呼び出しもあるからな…どうしよう……
その姿を見てなのはは恐る恐る尋ねた

「優君、私達と一緒じゃいや？」
聞いてくるなのはの方を見ると少し目を潤ませ上目遣いでいた。よく見ればフェイトとはやても同じようにしている

「いやな訳ないだろ！ただ地上本部からも呼び出しがあるから四六時中一緒にはいられないぞ」

それを聞くと三人の顔がいっきに明るくなった。
「もちろんそのつもりや。仕事内容は個別に聞いてな「了解」じゃあ六課全員をホールに集めとるから挨拶しに行こか！」

「その前一つだけ言わせてくれ。三人とも…無理はするなよ」
「優（君）……」
「まぁそれだけだ。はやくしないと置いてくぞ？」

「あ、うんって待ってよ優君～」

四人は部隊長室をあとにする

（マスター…あの事言わなくて良かったんですか？）

（無駄な心配をかけたくないからな…それにできるならこの事は知られないほうがいい。俺にとってもあいつらにとってもな）

俺がやる事は一つ、あいつらを守る…ただそれだけだ……

ｎｅｘｔ

模擬戦　前（前書き）

四話目です。

とりあえずあと一話かいたら主人公設定を書きたいと思います。

模擬戦　前

俺は今柱の後ろに隠れている。何故かというとはやてに隠れてろと言われたからだ。本人曰く皆を驚かせたいらしい

「皆忙しい中集まってくれてありがとな。集まってもらったんは今日から六課に出向する人を紹介するためや。それじゃ優君おねがい♪」

言われて出てみるとロングアーチ陣が「えええぇぇ！？」と言いたそうな表情をしている。スバルとティアナは一度会っているからかそれほど驚いていない

「わざわざ集まって頂きありがとうございます。今日から機動六課に出向となりました、如月優一等空尉です。立場は副部隊長となりますが気軽に接して下さい。一年間よろしくお願いします」

「あの如月さんってもしかしてあの有名な『銀髪の断罪者』さんなんですか？」

リインが質問した瞬間、優の放つ空気が変わった。殺気を放つようにして…

「そう呼ばれることもあるができるだけその名で呼ばないでくれ……」

静まりかえる部屋内。その沈黙を破ったのは部隊長であるはやてだった

「ま、まぁとりあえず自己紹介はこれぐらいにして、各自仕事に戻ろか！」

優ｓｉｄｅ

はぁ～やっちまったな～無意識だったとはいえ初見であれはやばいよな～これからどうしよう……

そんな事を考えているとなのはとフェイトが話しかけてきた。多分さっきの事についてだろう。

「優君さっきはどうしたの？いつもの優君らしくなかったよ？」

「悪い、無意識のうちにあんな事になってた。ほんとにらしくないよな…」

「抱え込んじゃだめだよ？何か悩み事があるならいつでも相談にのるから！」

「あぁ、ありがとな二人とも。だけど大丈夫だよ」

「「うぅ／／」」

そう言って二人の頭を撫でる。二人共、顔を少し紅く染め恥ずかしそうに俯く。ちなみに頭を撫でるのは昔からの癖だ。

「さてとそろそろフォワード陣の訓練の時間だ、はやく行かないとな！」

「「うん！」」

そうやって三人は訓練所に向かった。優にこの後降りかかる不幸のことなんて知るはずもなく…

next

模擬戦　後（前書き）

五話目です。戦闘シーン…難しいです。

模擬戦　後

優ｓｉｄｅ

今、俺達の前にはフォワード陣がきれいに整列している。ちなみにフェイトは執務官の仕事が急に入ったらしく途中で別れた

「じゃあ、早速訓練始めようかって言いたいところなんだけど今日は模擬戦の観戦をします。ということで優君お願いね♪」

はい！？そんなこと聞いてないぞ！つーかなんでフォワード陣はいかにも「楽しみにしてます」的な視線で俺を見てんだ！

（マスターやるしかないですよ。それにあれを使わない程度なら問題ないと思いますが）

（…そうだな……まったく先に言ってくれよ…）

「はぁ…で、相手は誰なんだ？」

「私だ！」

出てきたのはバトルマｎ…もといシグナムだった。目を輝かせながら、その右手にはレヴァンティンが握らていた。

「ったく相変わらずだな、シグナム…その癖はどうにかならないのか？」

「その癖とはなんだ？それよりも早くはじめるぞ！」

そんな訳で俺とシグナムは空中にいる。もちろんバリアジャケット

を着ている。

『ルールは戦闘不能か降参させた方の勝ちだよ。二人共、準備はいい？』

「「おう（大丈夫だ）」」

『じゃあ始めるね、レディーゴー！！』

合図がかかかると同時にシグナムが斬りかかって来た。それを魔力で作られた双剣で受け止め、激しい打ち合いをはじめた。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ティアナｓｉｄｅ

いま私の上空では二人が打ち合っている。シグナム副隊長も強いけど如月さんも強い。しかしあの人はデバイスを持たずにどうやって戦っているんだろう

「なのはさん、如月さんはデバイスを使わないんですか？それ以前のあの人はどうやって戦っているんですか？」

「優君は昔から魔力の使い方が上手でね、あれは自分の魔力を双剣の形にしているんだよ。だから基本的にはデバイスは使わないんだ」

「そうなんですか…」

（やっぱり凡人は私だけか…）

ｓｉｄｅｏｕｔ

空中では両者共に一歩も譲らない戦いが繰り広げられていた。斬り、防ぎ、回避し、また斬る。何度もこの動作が繰り返されていた。

これじゃきりがないな…

一発かましてやるか！

優は一旦距離をとり双剣をブーメランのように投げつけた。その左右から襲ってくる双剣を落としたシグナム、しかし彼女の視界に優は居なかった

「おらぁぁぁ！！」

「くっ！」

そんなシグナムの上には魔力でできた巨大な剣を振り下ろしながら突っ込んできた優がいた。とっさにレヴァンティンで防ぐシグナムだが勢いを殺しきれず地面にたたきつけられてしまう。だがすぐに体勢を立て直すシグナムに地面に降りた優は少し驚きの表情を見せた

「まさか今のを防がれるとはな…だが次で決めさせてもらう」

「甘く見てもらっては困るな。いいだろう、受けてたとう！」優は左手に魔力でできた日本刀を持ち居合いの体勢をとる。シグナムもカートリッジをロードしレヴァンティンを構える

「紫電……」

「無限……」

ーーーーーーーーーーーー

「一線！！！」

「乱線！！！」

両者が斬り合い沈黙が訪れた。いまだに双方共動かない。なのは達はどうなった分からずただ待っていた。そんな中…

「流石だな…如月…」

そう言ってシグナムは倒れる。優は慌てて近寄るがシグナムの意識

がはっきりしている事を知り胸を撫で下ろす

『シグナムさん戦闘不能、よって勝者優君！』

ｎｅｘｔ

オリ主設定（前書き）

オリ主紹介です。短いのでできればもう一話投稿します

オリ主設定

名前：如月（きさらぎ）　優（ゆう）
歳：二十歳（なのは達と同級生）
身長：１８０？
体重：７５？
髪：銀髪の短髪
階級：一等空尉
魔力：Ａ＋
魔力光：淡緑色
レアスキル：なし
バリアジャケット：白色のズボンに黒のＴシャツ、黒のコートを羽織る。

なのは達とは小学校六年生の時に転入生として出会った。過去の話は後ほど…

無限乱線（むげんらせん）
・魔力でできた日本刀を居合いの姿勢で構え、振り抜くと同時に魔力を一気に放つことで無数の斬撃をくり出す。
・魔力を多くすることで斬撃の数が増える。

デバイス：アイリス
インテリデバイス
待機状態：ブレスレット
戦闘時：変化なし（のちのちは…）
機能：おもに魔力の制御・演算

疑問（前書き）

六話目です。今回は少しシリアスが混じってます。感想お待ちしてますm（＿＿）m

疑問

優ｓｉｄｅ

模擬戦を終えた俺はシグナムに肩をかしてなのはとフォワード陣がいるところに戻った。何か知らないがなのはは少し不機嫌そうな顔をしている

「すまなかったな、如月。もう大丈夫だ」

シグナムは俺から離れて行く。それと同時にスバルが駆け寄って来た

「如月さん凄いです！あのシグナム副隊長に勝っちゃうなんて！」

「まぁこれでも一等空尉だからな。あぁそれと如月さんじゃなくて優さんとでも呼んでくれ。あんまり慣れてないんでな…ティアナとエリオとキャロも頼むよ」

「「「「「はい！」」」」」

ったく相変わらず元気だな、こいつらは。これも若さ故だな…

（何言ってるんですか、マスターだって充分若いですよ）

（アイリス！？心読むなっての…つーかこの絡みも何回目だよ…）

（長い付き合いですからね）

そんなやり取りをしているとスバルに変わりティアナが話しかけてきた

「優さん質問していいですか？」

「なんだティアナ？」
「優さんはどうしてそこまで強くなれたんですか？」
こいつはどうしてそんな事を聞いてくるんだよ。まったく…
「どうして強くなれた、か……人は想い一つで変わることができる。俺から言えることはそれだけだ…」
「想い…ですか……」
ティアナは俺の言葉を聞くと何か考えるように俯いた。
求めていた答えじゃなかったみたいだな……だが俺にとってはこれが答え、これが俺の存在意義なんだよ
「さてと、模擬戦も終わったし俺はデスクワークでもしますかな。いいかなのは？」
「あ、うん。大丈夫だよ！じゃあまた後でね！」
「「「「お疲れ様でした」」」」
「おう！」
ｓｉｄｅｏｕｔ
なのはｓｉｄｅ
「皆、さっき模擬戦を見てどんな事を思った？それをレポートにまとめて提出してね♪」
「「「「はい！」」」」
「それじゃ今日の訓練はここまで！」
「「「「ありがとうございました！」」」」

フォワード陣はさっきの模擬戦について色々と話しながら自室に戻っていた

ティアナの質問に答えてた時の優君の顔、なんかとても悲しそうだった…私が知る限り心当たりはない…この四年の間に何かあったのかな…後でフェイトちゃんとはやてちゃんに聞かなくちゃ！

ｓｉｄｅｏｕｔ

はやてｓｉｄｅ

うちは今、

リンディさんと通信と通信しとる。なんでもリンディさんが話したいことがあるんやて

「それにしても急にどないしたんですか、リンディさん？」

『ごめんなさいね、別に急に話すことじゃなかったんだけどね…話って言うのは優君のことについてなの…』

「優君のついてですか？」

『うん、彼とあなた達は四年間会ってなかったはずよね？』

「はい、時々連絡を取るぐらいでした」

『そう…じゃあそれを前提にお願いするわ、優君についての四年間は詮索しないで頂戴』

「！？どういう事ですか？この四年間で優君に何かあったんですか？」

なんやて！？今の言い方やと明らか何かあったって事や！そんなん見逃せる訳あらへん！

『お願い、これは私が言っていい事じゃないの。彼があなた達言い

出すまでは待って欲しいの…』
「分かりました。ただ優君に何かがあったかどうかだけ答えて下さい」
『……何かがあったことは確かよ…それじゃこの話は終わりね』
「失礼します」

うちらにも言えん事ってことなんか…優君、この四年間で何があったんや……

next

暗躍（前書き）

七話目です

これから少しずつ優が動き出します。ちなみに今回も若干シリアスです。

感想お待ちしてますm（＿＿）m

暗躍

優ｓｉｄｅ

シグナムとの模擬戦を終えた後、パソコンに向かいデスクワークをしていると通信が来た。発信者は…

「何か用ですか、リンディさん？というよりあの事以外は考えられませんが…」

リンディ・ハラオウン統括官だった。この人は俺にとって恩人のような人だ。色々と世話になった。色々と……

『えぇその事もあるんだけど……ごめんなさい…はやてさんに優くんの事、話してしまったわ……』

「！？詳細についても？」

『いいえ、ただこの四年間の事を詮索しないでって言っただけ……』

まったくこの人は何をしているんだ…そんな言い方したら、いかにも何かありましたって言ってるようなもんじゃないか…

「はぁ～まぁいいですよ。あなたが言ったなら、あいつらも詮索はしないでしょう。それよりも仕事の内容を教えて下さい」

『分かりました、今回の仕事はある犯罪組織を壊滅させることです。その組織はこれまでいくつかの次元世界で臓器売買、快楽目的に幾度となく殺人を繰り返してきました。昨日、居場所が判明し相手が相手だからあなたに任されたという訳。居場所は後で送るから……』

「了解しました。改めて許可を…」

『…はい、許可します……ごめんなさい、本当はこんなことさせた

くないんだけど…』

「あなたが気に病む必要はありません、それでは失礼します」

リンディさんとの通信が切れる。それにしてもあの人はいつまでたってもお人好しだな。そんな人がよく統括官になれたもんだ。まぁ俺もそんな彼女に救われたのだから何も言えないが……さてとデスクワークも終わったし、仕事にいきますか

（マスター、組織の居場所のデータが送られてきました。転移魔法で十分程で着きます）

（そうか…今回も頼むぞ、アイリス）

（はい…マスター、くれぐれも無理をしないで下さい…）

（あぁ分かっている）

これで何回目になるか分からないが俺達はまた出向くのだ。辺り一面に鉄の香りが漂い、赤く紅く染まる場所になるだろう場所へと…

ｓｉｄｅｏｕｔ

はやてｓｉｄｅ

リンディさんの話を聞いて、うちはなのはちゃんとフェイトちゃんを部隊長室に呼んで優君の事について聞くことにした。それが正しいことか分からへんけど……

「ごめんな、二人共。仕事があったやろうに…」

「大丈夫だよはやてちゃん。フォワード陣の訓練も終わったし」

「私も大丈夫だよ、はやて」

二人は微笑みながら言ってくれる。うん、やっぱ持つべきものは友

達やな！…おっとそんな場合やなかったわ

「そんなに重要な事やないんけどな。二人は優君がこの四年間、何しよったか知っとる？」

「う～ん、時々連絡はしてたけど何してたかは知らないな～」

「私はとにかく仕事が忙しいとしか聞いてないよ。どうしてそんなこと聞くの？」

二人にはまだ伏せとくべきかな…リンディさんにも釘打たれた訳やし…

「いや、ただ気になっただけや。やっぱ気になるやん？」

「まぁそうだけど…なのはどうしたの？浮かない顔して」

うちの質問に答えた後、顔を曇らせたなのはちゃんにフェイトちゃんが聞く

「…実はね、模擬戦の後ティアナが優君に聞いてたんだ。どうやったら強くなれるかって。その時の優君、なんか悲しそうだったの…だから何かあったんじゃないかって…」

「「……」」

なのはちゃんの言葉に静まりかえる部隊長室。そんな部隊長室に話題の人、優君が入って来た…あかん、なんか気まずいわ……

「失礼します」

「どうしたん優君？」

「地上本部から仕事が入ってな、三日程空けることになるから報告に来たんだ」

「…分かった、気をつけてな」

「あぁ」
「待って！」
それだけ言って出て行こうとする優君になのはちゃんが声をかけた
「優君、帰ってきたら少しだけ話さない？聞きたいことがあるんだ…」
「…帰ってきたらな…」
部隊長室を出て行く優君、うちらはその背中をただ見つめていた。
その目に不安を写しながら……
next

ファーストアラート（前書き）

八話目です

題名はアラートになっていますが、フォワード陣の活躍は書いてませんm（＿＿）m

ファーストアラート

ティアナｓｉｄｅ

訓練（模擬戦の観戦）を終えた私達はデバイスマスターのシャーリーさんのところに来ていた。私達の新しいデバイスを受け取るためにだ

「これが新しいデバイス…エリオのストラーダ以外はかなり変化してるわね」

「そうだね。ティアのクロスミラージュは二丁拳銃になってるし、私のマッハキャリバーもなんか凄そうだし！」

そんな事を言いながらスバルは目を輝かせていた。何浮かれてるのよ、まったく…ちびっこ二人だって落ち着いているっていうのに…

「皆のデバイスにはリミッターが付いているから、なのはさんから許可をもらったら私のところに来てね。リミッター外すから！」

「「「「はい！」」」」

それぞれが自分のデバイスを見ていると、突然警報が鳴った

「！？きっとアラートだわ。皆行くわよ！」

「「「うん（はい）」」」

やっときた初任務、気を引き締めなきゃ！ランスターの弾丸に貫け

ない物はないって証明するために…

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

俺がいるのはある廃墟。取り壊しが決まって半年経つがいまだに取り壊されていない。奴らにとって最高の隠れ家というわけだ

（ここが、組織の居場所か…アイリス、中に何人居る？）

（七人です。その中に魔導士が二人、質量兵器を持つのが四人います）

（そうか…人数が少なくて助かるぜ…さて正面から行きますか！）

入口である扉を蹴破る。こっちに気づいた犯人達はそれぞれ武器を構えるガンをくれていた

「なんだてめぇ？ここはお前みたいなガキが来るところじゃないんだよ！」

「うぜえな…管理局の者だ。おとなしく投降すれば弁解の予知はごくわずかだがあるぞ。おとなしく投降した方が身のためだ」

「誰が投降なんてするかよ！そうだ、いい事思いついたぜ。てめぇをぶっ殺した後、てめぇの生首を管理局に送りつけてやるよ。安心しな、臓器はちゃんと売りさばいてやるからよ！」

犯人達はリーダー格の男の言葉に同意し狂ったように笑っている。

この屑共が……

「一応警告してやったからな、これからは俺のやり方でやらせてもらう。死んでも文句言うなよ？」
「「上等じゃボケ！」」
犯人達は魔力弾や拳銃で攻撃してきているが一発も攻撃は通らない。なぜなら俺が魔力で作った盾によって全て防いでいるからだ。そんな犯人達は性懲りもなく打ち続けているが結果は変わらない…
「くそ、なんで当たんねぇんだ！？もっとだ、もっと撃ちまくれ！」
「そんなの当たるかよ。ファングイーター、セット」
両手から粒子状の魔力を放ち、犯人達を取り囲む。犯人達は攻撃に意識が向いていて気づいていない
「これが最後の警告だ、投降した方がいいぞ」
「うるせえ！死にさらせ！！」
犯人達は耳も貸さず、なおも攻撃を続ける…まったく馬鹿な奴らだ…投降すれば死ななくてすんだものを…まぁどっちにしても死ぬのが早くなるか遅くなるかの問題だから、あまり意味はないが……
「……ファイア……」
放たれた魔力は杭のような形を形成し一斉に犯人達を貫ぬいていく
「ぎゃあぁぁぁぁ！！！」
「や、、やめてくれぇぇぇぇ！！！」
犯人達の悲鳴が止むとそこは辺り一面、血溜りとなっていた。だいたいが死んでいるが生き残っている者がいた。リーダー格の男だ

「た、助けて…くれ…な、なんでも…するから…」
「残念ながらお前達はすでに生存権を失っている…だからここで死ね…」

魔力で剣を形成し男の首に当てると男は遂に喚きだした

「か、管理局の人間が…こんなこと…」
「悪いな…俺は裏の人間だから、殺しをしても問題にはならないんだよ。じゃあな、罪人…」
「ま、待ってK……」

男が言葉を発することは二度となかった…

（…仕事は終わったな…）
（お疲れ様でしたマスター）
（あぁお前もな…六課の連中はどうしてる？）
（今はレリックを回収しに任務に出ています）
（そうか…あいつらなら問題ないだろうが、一応行っておくか…）

「ムーブ…発動！」

ーーーーーーーーーーーーーー

ところ変わって場所はリニア。俺が着く頃にはフォワード陣は無事にレリックを回収し後は引き継ぎをするだけとなっていた

（来る必要はなかったみたいだな…）
（そのようですｎ…！？マスター、ガジェット反応がフェイトさんの近くに！本人は気づいていません！）

（何！？すぐに向かうぞ！）

ｓｉｄｅｏｕｔ

フェイトｓｉｄｅ

レリックも回収したし後は六課に帰るだけ、そう思ってた矢先だった

『フェイトちゃん、後ろ！』

なのはから突然の通信に反応し後ろを見ると攻撃をしようと突っ込んでくるガジェットがいた。間に合わない、そう思い目を瞑った…が来るはずの衝撃はいつまでたっても来ない。目を開けるとそこには私の肩を左手で抱き、右手で防御している優がいた。攻撃を防ぐと同時に淡緑色のスフィアがガジェットを撃ち落とす

「大丈夫か、フェイト？」

「う、うん／／／／ありがとう、優／／／／ところでどうし優はここに？」

「仕事が終わったからな、アイリスから状況を聞いて顔を出したって訳だ。さてとガジェットの反応もないしレリックも回収したようだし帰るぞ」

「うん、そうだね！」

next

sideout

ファーストアラート（後書き）

技説明

ファングイーター
・辺りに放った魔力を杭のような形にして飛ばす。
・形のイメージはフェイトのプラズマランサー。
・数を少なくすれば複雑な動きで放つことができる

ムーブ
・転移魔法
・時間をかければかなりの距離を転移できる

日常

優ｓｉｄｅ

フォワード陣が自分達にとっての初任務を終えたの次の日、俺はシグナムとヴァイスと共にフォワード陣の訓練を見ていた

「それにしてもあいつらかなり張り切ってますね。」
「初任務がいい刺激になったのだろう。まだまだ未熟だがな…」
「自分達でも任務を成し遂げることができる、そう思い体験したことで自信がついたんだろうな。」

スバルやエリオ、キャロはそれぞれが新しく思う所があったんだろう…ティアナに関しては…まぁ俺が首を突っ込まない程度で済めばいいんだけどな…なのはは気づいているのだろうか…

「そうっすね、そういえばシグナム姉さんと旦那は訓練に参加しないんすか？」

「私は古い騎士だ、高町のように何かを教えることはできない。教えられることは、懐に入って切れ、それだけだ。」
「それがある意味で最強なんっすけど…旦那の方は？」
「俺はなのはから頼まれた時に見てやるだけだ。まぁそろそろ頼まれるだろうがな…」
「そうっすか…じゃあ俺はヘリの整備に戻りますわ。あいつらのこと宜しくお願いします。」

ヴァイスは俺達に敬礼するとその場を立ち去った。あいつも過保護だな、いや面倒見がいいと言っておくか…あいつも前に進めればいいんだが、まぁ無理もないか…

「ところで如月、お前は昨日どこに行っていた？」
「地上本部からの仕事でちょっとな…あまりたいした事じゃないから気にしないでくれ。」
「そうか。」

シグナムはそれ以上追求して来なかった。たいした事じゃないか…本当にそう思えるならどんなに楽なことか…まぁ俺がこの罪を背負わなくて済む日が来る訳ないが…

ｓｉｄｅｏｕｔ

なのはｓｉｄｅ

今日から個人演習になって、今はティアナに付きっきりで指導している。スバルはヴィータちゃん、エリオとキャロはフェイトちゃんが見てくれてる。

「こら、ティアナ！動き回ったらだめだよ！」
「はい、すみません！」

昨日の初任務のおかげでフォワードの皆のやる気が高まって訓練も順調に進んでる。この調子だったら明日からでも優君に見てもえるかな。

「皆集合〜！訓練お疲れ様！」
「「「「「お、お疲れ様でした〜」」」」」
「やっぱり個人的な訓練になるとちょっときついかな？」
「は、はい」
「ちょっと言うよりかなり…」

フォワード陣はかなり堪えているみたい。でもこれも皆のためだから、これからもしっかりと訓練メニュー考えなくちゃ！

「じゃあ今日はこれで解散にするね。明日も訓練頑張ろうね！」
「「「「「はい、ありがとうございました！」」」」」

フォワード陣は疲れた様子で自分達の部屋に戻って行った。さてとフォワード陣の訓練も終わったことだし…

『…なのはか、何か用か？』
「うん、前に言ったよね帰って来たら一緒に話そうって。だからこのあと時間あるかな〜と思って」
『ちょっと待ってくれ…そうだな夕食後でいいなら大丈夫だ』
「分かった、じゃあとで私の部屋に来てね♪」
「りょ〜かい」

…やった！！！ようやく優君とゆっくり話せる。この四年間もだけど六課に来てからもあんまり話してなかったし。それに聞きたい事もたくさんあるから……

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

フォワード陣の訓練を見るのを途中で切り上げ、仕事に行っていた日の分のデスクワークをやっていると通信が入った

「…なのはか、何か用か？」

『うん、前に言ったよね帰って来たら一緒に話そうって。だからこのあと時間あるかな～って思って』

話か～この四年間の事、色々と聞いてくるんだろうな。うまく誤魔化さないとな…それにしても訓練後ってのに元気だよなぁ、まぁ教える側だからそんなに疲れないだろうが…さすがはワーカーホリックだ

「ちょっと待ってくれ…そうだな夕食後なら大丈夫だ」

『分かった！じゃあとで私の部屋に来てね！』

「りょ～かい」

はぁ～まだまとめないといけないレポートがあるんだけどな…つーか年頃の女が男を部屋に呼ぶってどうよ！？下手すれば俺は社会的に殺される…

（いやらしい事を考えないで下さい。それでもあなたは私のマスターですか！？）

（有らぬ誤解をするな！俺はそんな事一切考えてないぞ！）

（女性に興味がない…そうですか、マスターはこっち系だったんですね？）

（だから…はぁもういい、お前との絡みは何か疲れる）
（お褒めに預かり光栄です♪）
（誉めねぇよ！）

ったくこいつは何でいつもこんな絡みをしてくるのだろうか…ちなみに俺がこいつをデバイスにしてからはこんな事が日常茶飯事になっている。まぁ俺も何気に楽しんでいるんだが…

（そんな事よりも、マスター。なのはさん達に話してもいいんじゃないですか？あの人達ならマスターのことを…）

痛いところをついてくるなこいつは…人が気にしていることを…

（…今はまだ…話すべきじゃないと思う…いつかは話さないといけないんだが…）
（そうですか…ならはやくデスクワークを終わらせて、なのはさんのところに行きましょう！）
（そうだな…）

ーーーーーーーーーーーー

夕食のハンバーグ定食を食べた俺は今、若干気まずい状態でなのはの部屋を目指している。すれ違う女性職員の目が痛い…本人達にその気はないのだろうが…

「あれ、優！？どうしたの？」
そこにはフェイトがいた。どうやら今仕事が終わり部屋に戻る途中らしい。

「なのはから部屋に呼ばてな、何でも話があるらしいんだ」

「そうなんだ、なら一緒に戻ろ♪」

そう言いながら腕を絡ませてくるフェイト。おいおいこんな事してたら誤解されちまうだろ！

「まぁいいか…それじゃあ行くか！」

「うん♪」

こうして俺達はなのはの元に向かった。俺達を見た瞬間、ひきつった笑顔を浮かべたなのはが居るのも知らずに…

next

話（前書き）

十一話目です！

なのはのゲーム買ってきました！一日やりこみＳＴＯＲＹだけ全部クリアしました！

感想お待ちしてますｍ（＿＿）ｍ

話

なのはｓｉｄｅ

いつも以上に片付いた部屋で私は紅茶を作りながら優君を待っていた。部屋は特に散らかっている訳じゃないけど念には念をね♪それにしても優君を部屋に呼ぶって…かなり大胆だよね／／／

「そのまま流れで…んふふ／／／」

そんな事を考えていると部屋のインターホンが鳴った。優君が来たみたい♪

「いらっしゃい♪待ってｔ……優君は何でフェイトちゃんと腕を組んでいるのかな？」

ドアを開けるとフェイトちゃんと腕を組んだ優君がいた。あれ、なんだろう…体の奥深くから煮えたぎるものを感じるの…

「私達、恋人になったんだ♪」

「何言ってんだ！なのは、これはフェイトが勝手にしていることだから誤解するなよ！？」

「…優君、このあとゆっくりお話しようね？」

「い、いやだかｒ…」

「い・い・ね？」

「は、はい…」

「それじゃあ椅子にでも座って待ってて、紅茶いれて来るから♪」
まったく優君ったら…でも油断してたらフェイトちゃんやはやてちゃんに取られちゃう…なんとかしなくちゃ！

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

今俺はなのはに言われて椅子に座っているわけだが…絶対に俺は悪くないだろ！それで何で俺だけお話なんだよ！フェイトは着替えてくるって言って隣部屋に逃げやがったし…はぁ最近は疲れるな…

「お待たせ、
紅茶いれて来たよ♪」
「サンキューそれにしてもいい香りだな、その紅茶。」
「うん、この前シャマルさんに貰ったんだ。なんでも有名なブランドの紅茶なんだって！」
確かにそんな感じがする。色は透き通っていて一切濁っていない。この香りを嗅いだだけどんな人でも心が穏やかになる、そんな上品なものだった
「お待たせ～」
パジャマに着替えたフェイトが隣の部屋から出てきた。着ているのはオレンジ色のパジャマでごく一般的な物だ。ちなみに髪を結んで

いるリボンは外してありきれいな金髪が動く度に揺れている。

「似合ってるな、フェイト」

「あ、ありがと／／／」

頬を紅く染めながら俯くフェイト、それを見たなのははどうも面白くない様子で頬を膨らませていた。ちなみになのはは赤色のパジャマを着て、こちらもリボンを取っていた。そんななのはが俺に詰め寄ってくる。

「ずるいよ、フェイトちゃんだけ！私は似合ってないの？」

「そんな訳ないだろ！？ただ言いそびれただけだよ。もちろんなのはも似合ってるよ。つーか二人共可愛いんだから似合わない訳ないだろ！」

「「かわいい…／／／」」

（マスターは「たらし」ですね）

（何言ってんだ、そんなつもりは一切ない…）

（周りからはそう見られるんですよ、「たらし」さん♪）

まったくアイリスには一日に何回いじられればいいんだよ…

（最低十回です♪）

（心を読むな！つーか十回は多すぎだろ！？）

（これでも少なくしてるんですよ？）

（はいはい、そうですか…）

「ところで話ってなんだ？」

ベッドに腰掛けているなのはに尋ねる。フェイトもその隣にいる。
「うん、あのね…優君に聞きたい事があるの。聞いてもいい？」
「答えられる範囲ならいいぞ。」
やっぱりな…うまく誤魔化せるといいが…というかやるしかない！
「優君、六課での生活はどう？」
「！？…かなり充実しているよ。人は皆優しいし、設備も充分整っているし、部隊としてもかなり優秀だと思うよ。」
いきなりは聞いてこないか…そこらあたりの配慮はできるようになっていたんだな…
「そうなんだ、良かった♪多分六課の皆もそう思ってるよ！ね、フェイトちゃん♪」
「うん、はやてやシグナムをはじめ本当にいい人ばかりだよ！」
そう言って笑顔を見せる二人。いい人ばかりか…確かにここはそうだな……ある意味羨ましいな…裏を知らない人間ってのは…まぁこうなったのは自業自得だ…どうしようもない…
「それでね、これは一番聞きたい事なんだけど…優君はこの四年間、何をしていたの？」
「それ私も聞きたいなぁ。たまにしか連絡くれなかったし、何をしてるか教えてくれなかったから…」
「何って仕事だよ、ある部隊で働いてた。あの頃はすごく忙しかったからあまり連絡できなかったんだ…」

実際、そうだったんだよ。三年前まではな…そう三年前までは……

「ホントに？」

「あぁそれとも嘘に聞こえるか？」

「ううん、優君は嘘つかないもん。じゃあ最後の質問、この四年間で何かあった？あったなら教えて欲しいの…」

嘘をつかないか、今まではそうだったな…けどごめんな二人共…今初めてお前達に対して嘘をつかせてもらう

「…たいした事は何もなかったよ。至って普通の四年間だったよ…」

「…そうなんだ」

二人共なんか符に落ちない顔をしてるな…フェイトはそうでもないが、なのはは…少し感づかれたか？…詮索される前にさっさと逃げるか…

「おっと、もうこんな時間か。俺はそろそろ自分の部屋に戻るよ」

「あ、うん…おやすみ」

「また明日ね、優♪」

「おやすみ二人共…あと紅茶うまかったよ。」

さてうまく誤魔化せただろうか…もし感づかれてもリンディさんが話したりしなければ、ばれることはないだろう…いくらあいつらでも管理局のトップシークレットまで調べられないはずだ…

「よし、部屋に帰って寝ますか！」

「マスター、まだデスクワークが残ってますよ。」

「…そういえばそうだったな…今日は徹夜かな…」

三時間ぐらいは寝れたらいいな…

ｓｉｄｅｏｕｔ

なのはｓｉｄｅ

最後の質問の時の優君、

少しだけほんの少しだけ悲しそうだった…四年前までは見たことない表情だった…

「どう思う、フェイトちゃん？」

「何があったのかは分からないけど、何かがあったことは確かだよね。優があんな表情するってことは…」

「それも私達に話せないような事…明日はやてちゃんに相談してみない？」

「そうだね、はやてなら何か知ってるかもしれないし！」

ねぇ優君、あなたは何を隠しているの？…何を思っているの？…私達じゃ力になれないの？…

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｎｅｘｔ

出張任務？（前書き）

十二話目です

ＰＶ一万突破しました！
本当にありがとうございます！
来年は受験生なので更新はあまり出来ないかもしれませんが、これからも宜しくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

出張任務？

スバルｓｉｄｅ

私はいま、八神部隊長からの伝言を伝えるために男性寮のある人の部屋の前にいる。

「ちょっと緊張するなぁ…八神部隊長は部屋に居るって言ってたし…うん、大丈夫だよね！」

「スバル、何してるんだ？」

インターホンを押そうとしたその時、誰かに声をかけられた。振り返って見ると…そこには部屋に居るはずの優さんがいた。

ーーーーーーーーーーー

「出張任務？」

「はい、なんでもロストロギアが観測されたらしいです。出発は二時間後なので急いで準備をしてくれって八神部隊長からの伝言です！」

部屋の外で話すのもなんだからということで優さんが部屋に入れくれた。部屋には生活に必要な最低限の物しか置いてないようで、よく言えばきれい、悪いく言えば殺風景な状態だった。

「それだけのメンツが行くなら俺が行く必要はないと思うのだがな…まぁ行くしかないか。どこに行くかは聞いたか？」

「いえ、行き先については移動中に説明するそうです。なんでも優さんやなのはさん達も知っている場所だとか」

そうか、と言って何かを考え込む優さん。なんかこうして見ると優さんって頼れるお兄ちゃんって感じがする。まだ会ってそんなに日は経っていないけど…自分にもこんなお兄ちゃんがいたらいいなって思う。

「それじゃあ準備しますか。出張だから色々と必要だろうし…ありがとなスバル、伝言伝えにわざわざ来てくれて。」

「は、はい／／／」

立ち上がった優さんは私の頭を撫でてくれる。あぁずっとこうしていてほしいなぁ。そうだ！

「あの優さん、一つお願い聞いてもらえますか？」

「ん？まぁ俺にできる事ならな。伝言のお礼もあるしな。」

「じゃあその…優兄って呼んでいいですか？」

「…俺なんかでいいなら構わないぞ。」

「うん♪」

やった♪前からお兄ちゃんっていう存在に憧れてたから、しかも優兄が私のお兄ちゃん…やっぱりうれしいな♪

「じゃあまた後でな、スバル！」

「うん、またね優兄♪」

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

何故かスバルが義妹になったんだが…こんな奴のどこがいいのだろうか…それに本当の俺を知ったらどんな反応するのかね…それにしても出張任務とは、面倒くさいな。しかも俺達の知っている所っていえば…

「準備する物ってそんなにないんだけどな。」

持っていく物って言ったら仕事のときにいつも持っていくサングラスと通信機ぐらいだ。

「そろそろ行くか…」

ーーーーーーーーーーーー

なのはｓｉｄｅ

私達は出張先で私とはやてちゃんの出身地でもある『地球』に来ている。はやてちゃん達とは後で合流することになっていて、今は現地協力者のアリサちゃんの別荘にいる。

「久しぶり！アリサちゃん♪」

「なのは！ずいぶん久しぶりね！」

連絡はたまに取っているけど直接会うことはそんなにないから会えて本当に嬉しい♪

「その子達はなのはの教え子？」
「うん、こっちはスバルでこっちはティアナ。」
「スバル・ナカジマ二等陸士です！」
「ティアナ・ランスター二等陸士です！」
「「よろしくお願いします！」」
「私はアリサ・バニングス、なのは達の幼なじみで現地協力者をやっています。」

良かった、三人共なんなく馴染めたみたいだね。まぁ心配はしてなかったんだけどね。

「ねぇなのは、向こうに居るのってもしかして優？」
「うん、そうだよ！優く～ん！」手を振って呼んでみると湖を眺めていた優君がこっちにやって来た。

「久しぶりね、優。なんで声かけてくれなかったのよ？」
「二人でゆっくり話す事があるだろうと思って離れていただけだよ。俺が居たら話づらいだろ？」
「そんな事はないんだけど…」

優君らしく気をつかってくれたみたい。優君はなんだかんだ言っていつも私達の事を考えていてくれる。大切な物を守るためなら自分が傷つくのも構わない。そんな優しい人、だから私は彼を好きになったのかもしれない…

「まぁ何にしても久しぶりだな、アリサ。昔みたいにロングもいいけどショートも似合ってるな」
「い、いきなり何言ってるのよ／／／」

しかも何気ない一言が乙女心を刺激する。アイリスが「たらし」と言っているのも頷ける。

「まぁある程度話も済んだことだし、仕事に取り掛かるぞ。」

「うん、そうだね！まずはロストロギアが観測された場所やその周辺に監視用のスフィアを配置、その後は反応があるまで待機だよ。」

「「「了解（です！）」」」

それにしても優君は湖を眺めながら何を考えていたんだろう…どこか遠くを見ていた感じがしたけど…

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

スフィアを配置した俺達は別荘に戻る前になのはの実家である『翠屋』に向かっていた。なんでもお土産を持って帰るらしい。

（優兄、なのはさんのご両親ってどんな人達なの？）

（ん？初め見たら驚くだろうな。まぁ見てからのお楽しみだ。）

（えぇ～教えてよ～）

（楽しみは後にとっておく物だぞ。）

そんなこんなで『翠屋』に着いた。相変わらず綺麗な店だよなぁ。そういえば昔ははやて達とよく来ていたな。学校帰りに寄って雑談して…あの時間がずっと続いてくれたらどんなに幸せなことか…

「いらっしゃいませ～ってなのはじゃない！」

「久しぶり、お母さん！」

出迎えたのはなのはの母親の高町桃子だった。最後に会ったのが四年前のはずなんだが…全然変わってない…なんでこんなにも若々しいのかね…

（若！）

（優兄、本当にこの人がなのはさんのお母さんなの？）

（あぁそうだ。久しぶりに見たけどあんまり変わってないよ）

（！？優さんは前に会ったことがあるんですか？）

（まぁな）

「そっちの二人はなのはの教え子？」

「スバル・ナカジマ二等陸士です！」

「ティアナ・ランスター二等陸士です！」

ティアナとスバルは驚きを隠せないらしく今だに桃子さんを見ている。しばらくすると店の奥からなのはの父親、高町士郎が出てきた。

「おぉ久しぶりだな、なのは！元気にしてたか？」

「久しぶり、お父さん！もちろん元気だよ」

相変わらず仲がいい親子だよな…桃子さんがこっちを見ている、どうやら気付かれたらしい

「貴方はもしかして優君？」

「はい、ご無沙汰しております。桃子さん、士郎さん」

「あらやっぱり！ずいぶん頼もしくなったわね」

「まったくだ。男らしくなったな！」

「ありがとうございます。お二人も相変わらずお元気そうでなによ

りです」

二人には昔、よく面倒うを見てもらっていた。なのは達と仲が良かったのと俺に両親がいなかったからだろう。

「フェイトちゃん達とここで待ち合わせになっているんだけど、しばらく待っていても大丈夫？」

「大丈夫よ。ちょっと待っててね、お菓子と飲み物持って来るから」

「は～い！」

「優君、少しいいかい？」

「はい」

士郎さんに呼ばれた俺は今、高町家の道場にいる。俺達は正座をしながら向かい合っている。

「悪いね、呼び出してしまって」

「いえ気にしないで下さい。それで何のお話でしょうか？」

「ふむ、優君。人とは月日が過ぎるうちに変わっていくものだ。もちろんそれは大なり小なり全ての人に当てはまる…単刀直入に聞こう、優君この四年間で何があったんだい？昔と比べると今の君はまるで別人じゃないか！？なのは達も薄々気づいているのだろうが…」

まさか士郎さんにまで気づかれるとは…いやこの人だからこそ気づいたと言うべきか…

「多くは語れませんが…俺はもう表側の人間には戻れなくなってしまった…ただそれだけです…」

「そうか…詳しくは聞かないでおこう。だが忘れないでくれ、私達はいつでも君の味方だということを」

「はい、ありがとうございます。ではそろそろ失礼します」

その後フェイト達と合流した俺達は車で別荘に戻った。いづれ繰り広げられる食事と言う名の戦いが待つ場所へ

sideout

next

出張任務？（前書き）

十三話目です

はぁ～２０１１年もあと一日を切っちゃいました…はやいものですね～

出張任務？

優ｓｉｄｅ

『翠屋』から帰って来た俺の目の前に広がっているのは、食事と言う名の戦争だった

「あぁ～ヴィータ副隊長、それは私が育てたお肉ですよ！」
「ふん、お前が気を抜いているからだ…ってシグナム！アタシの肉取るな！」
「そういうお前も気を抜いているからだ」

はぁこいつらはもっと静かに食事ができないか…向こうのテーブルは静かだっていうのに。ん？さっきまでこっち（戦場）にいたティアナがあっちにいる、なるほど考えたな…なら俺も便乗させてもらおうか

「俺もこっちで食べていいか？あっちではどうにも落ち着いて食べれそうにない」
「うん♪じゃあ私の隣に…」
「だめだよなのは！優には私の隣に座ってもらうよ！
「なんｄ…」
「なのはは優と午前中、一緒に行動したでしょ！」
「それを言われると…」

そんな訳で俺はフェイトの隣に座る事になった。ちなみに席順はフェイトの右側にエリオとキャロ、左側に俺といったところだ。

「それにしてもこの焼きそば美味しいですね！」

「まぁはやてが作った焼きそばだからな。あいつは料理が上手だからな」
「そんなに誉めても何も出らんで～それにうちより優君の方が料理上手やろ！？」
「え！？優さんって料理出来るんですか？」
「そうや、しかも三ツ星料亭の料理長が絶賛するほどやで！…久しぶりに食べたいな～優君の料理…」
「私も食べたいな～エリオとキャロも食べたいよね？」
「「はい！」」

いかん、この空気は…前にもこんな流れで料理を作らされた記憶がある…あれは中学三年の夏休みの時だったか…泊まり掛けで宿題をやろうと言う事でフェイトの家に行ったはいいが、その日リンディさんがいなくて代わり俺が作ったんだよな

「はぁ分かったよ、だがあまり期待するなよ？」
「大丈夫やって！優君の料理は何でも美味しいんやから！」

変なプレッシャーかけるなよ…キッチンにある大型冷蔵庫の中を見るとある程度の物は揃っていた。短時間でできるものって言ったら…あれしかないか

ーーーーーーーーー

「お待たせ、時間があまり無かったからたいした料理は作れなかったよ」
「やっと来たな、優君♪これはタルト？」
「あぁ食後にはデザートがいいかなって思って果物のタルトを作ってみた。果物は一度それぞれのジャムに浸け込んだから風味が良くなっているはずだ」

均等な大きさに切り分け、皿に乗せて皆に配る。ちなみにこれを作るのにかかって時間は一五分といったところだ

「「「「「「いただきま～す」」」」」」

「美味しい！？優兄これすごく美味しいよ！」
「ケーキ屋で売られていても不思議じゃないです！」
「「おいしい～！」」
「ギガウマだ～！」
「まったくだ」
「なんで男のあんたがスイーツ作れるのよ…」
「やっぱり上手だね優君は♪こんど教えてもらわなくちゃ！」
「相変わらず優君の料理は絶品やな…うちやったらこんなもん作れへんわ…」
「これじゃあ旦那さんの方が料理が上手になっちゃうね…」
「うぅ、優に料理で勝てるのかな…」

後の二人の事は無視してかなりの好評価らしい。時間があればもう少しまともな物が作れたんだけどな…

「さてと食事も済んだことやし、皆でスーパーセントウに行こか！
「スーパー？」
「セントウ？」

ーーーーーーーーーー

ということでスーパーセントウに来た俺達だが、今エリオが絶体絶命の状況に陥っている

「一緒に入ろうよ、エリオ君！」
「いや、僕は男の子だし…それにティアナさん達もいらっしゃるから…」
「私は構わないわよ」
「そうだよ、それに前から頭洗ってあげるって言ってたじゃん」
「で、でも…」

エリオがいかにも助けて下さいという目で俺を見ている。しょうがない、助け船を出してやるか

「悪いな、エリオは俺が洗ってやることになってんだ。なぁエリオ？」
「え？あ、はい！そ、そういことなので失礼します」

そう言うやいなやエリオは脱兎のごとく男湯に走って行った。じゃあ俺も入るかな…

ｓｉｄｅｏｕｔ

フェイトｓｉｄｅ

今、私となのはとはやては露天風呂に向かっている。久しぶりの温泉だからしっかりと堪能しようとはやてが言ったからだ

「久しぶりの温泉もいいもんやね～」
「にぁははは、ミッドには温泉ないからね」
「そうだね、ん？向こうに誰か居るみたい」

だんだん近づくにつれて視界がはっきりしてきた。そこに居る人が誰かと思って見てみると…何故かそこには優がいた

「な、何で優君がここに居んねん！？」

「それはこっちのセリフ……お前らそこの張り紙見てみろ」

優が指差す方向には一枚の張り紙があり、そこには『混浴』と書かれていた。ちなみにお互いタオルを体に巻いていたから裸を見られたわけじゃない

「しばらく来ない間に混浴になっていたんだな…」

「う、うん…そうだね」

私達は優と背中合わせになるようにお湯に浸かっている。好きな人だからと言って流石に向かい合うのは……／／／なのはとはやてもなんだかもじもじしてる…やっぱり意識したぁうのかな…

「さて、俺はそろそろ上がるかな」

「あ、待って優！」

何故かとっさに優の腕を掴んでしまった。自分もで訳が分からない

「どうした、フェイト？」

「い、いや、あの…ちょっとお話しない？四人だけっていうのもあんまり無いことだし」

「それもそうだな」

と言っても話すことが思い付かない…ん～何か思い付かないかな…ん～

「ねぇ優って好きな人居るの？」
あわわ、私ってば何聞いてんだろ…話すことが思い付かないとは言っても、咄嗟に出てきたのがこれなんて…
「好きな人か～それは恋愛対象ってことか？」
「う、うん」
なのはとはやても耳を澄まして聞いている。やっぱり気になるよね、自分の好きな人のことだから…
「そうだな、そういう風に思った人は今まで居なかったな…」
「そ、そうなんだ…」
「じゃあ俺は上がるぞ、三人ものぼせる前に上がれよ」
そう言って優は脱衣場に向かった。その姿を見ながら私達は押し黙ってしまった
「…私達は優君にそういう目で見られていないんだね…」
「せやね…あくまでうちらは友達同士なんやろか…」
「ちょっとショックかな…」
ｓｉｄｅｏｕｔ
優ｓｉｄｅ
三人と別れ着替え終わった俺は今はロビーでコーヒーを飲んでいる。それにしても、恋愛対象として好きな人か…こんな人殺しが人を好

きになる権利なんて持っている訳ないだろ…お前らも本当の俺を知ったら…

（マスター、ロストロギアの反応です）
（場所は？）
（ここからそんなに遠くありません）
（そうか、じゃあさっさと終わらせるか）
（はい、マスター）
（なんだアイリス？）
（そんなに自分を責めないで下さい。これはマスターのせいではないんですから…）
（だが俺が人の命を奪っていることに変わりはない…ナビ頼むぞ）
（了解…）

sideout

next

出張任務？（後書き）

タルトは『焼きたてジャパン』を参考にしました。主に果物のところを。

出張任務？（前書き）

十四話目です

皆さんあけましておめでとうございます！（一日遅れですが…）

今年はどんな年になるんでしょうかね？自分は受験です…

更新のペースは遅くなってしまいますが、今年もどうぞ宜しくお願いしますm（＿＿）m

引き続き感想お待ちしてます（今まで来たことありませんが…）

出張任務？

優ｓｉｄｅ

スーパーセントウを跡にしロストロギアの反応があった場所に来てみたはいいが…

「なんだこれは？」
「スライムみたいですね」
「ちょっとかわいいかも…」

目の前には緑色のスライムがたくさんいた。どうやら危険を感じると分裂するらしい

「これじゃあどれが本体か分からないな」
「そうですね…」
「ティアナとキャロはどれが本体か探してくれ。俺達はできるだけこいつらの数を減らす」
「「了解！」」

それにしても面倒くさいな…普通に攻撃しても分裂しやがるし…スバルとエリオも苦戦しているみたいだし、あれを使うか…

「優さん本体見つけました！今、キャロが封印処理をしているとこ

ろです」
「そうか、ご苦労様」
案外早く終わったな、もう少しかかると思っていたが…まぁこれであとは帰るだけだな

ーーーーーーーーーーー

本来なら任務が終わったからミッドに帰らないと行けないんだが、今日は別荘で一泊していくことになった。なんでも騎士カリムの粋なはからいらしい

「なんや悪いな、うちらだけ休んでシグナムだけロストロギアの運送なんて…」
「いえ、気にしないで下さい。では行って参ります」
「うん、気ぃつけてな」

シグナムは一人、転送装置に向かいそのままミッドに行ってしまった。主思いだなシグナムは…まぁ確かにはやては働きすぎだからな…

部屋に戻ってみるとなんとも和やかな風景が広がっていた

なのは達はアリサ、すずかと昔話に花を咲かせ、フォワード陣はソファでのんびりとしている。ヴィータとリインはテーブルでアイスを食べていて、シャマルは…どうやら料理のレシピを見ているらしい

「優兄、何してるの？」

外のウッドデッキに座っていると、さっきまでソファにいたスバルが隣に座ってきた。なんでこいつはこんなに人慣つっこいのかね…

「何って…ただ月を眺めているだけだよ」

こうして地球の月を見るのもかなり久しぶりだしな

「そうなんだ…そういえば優兄って地球の出身なんだよね。昔のなのは達とはどんな関係だったの？」

「ん？そうだな…なのは達と出会ったのは中学二年の時だったかな。俺がこっちに引越してきて声をかけて来たのがあいつだった。んでよく遊ぶようなって今に至るって感じだ」

「そうなんだ」

まぁこっちに来て一ヶ月後ぐらいに俺が魔導士というのがばれたんだがな。それからはミッドでも一緒に居たな…というかほとんどあいつらと一緒に居た思い出しかないぞ…

「さてと任務前にご飯もお風呂も済ませたし、そろそろ寝よか！」

時計を見ると十一時だった。ちなみに部屋割はなのはとアリサとすずか、フェイトとエリオにキャロ、スバルとティアナ、八神一家となった。

「あれ、そうしたら優の部屋がなくなるわね…」

「俺の部屋はいいよ。リビングのソファにでも寝ればいいし」

「で、でも…」

「まぁ気にするな。それよりさっさと寝るぞ」

そう言うとアリサは符に落ちない様子だったが自分の部屋に戻って

いった。

（マスター、夜這いしちゃいけませんよ！）
（するかよ、夜這いなんて）
（本当ですか～？）
（本当だ！）

まったくよく喋るなこいつは…というか夜這いなんてしたら、社会的に終わってしまう。しかも半殺しされてしまう、あの三人に…

ｓｉｄｅｏｕｔ

はやてｓｉｄｅ

いつもより早めに寝ることが出来るはずやったんやけど…あかん、何や知らんけど寝つけんわ…皆を起こす訳にもいかんし、外でも散歩するとしよか…

ーーーーーーーーー

皆を起こさんように出てきたんはいいが、どこに行こうかな…そうやあの海にでも行こか

うちらと優君が出会ったのがこの海鳴の海やった。優君が転入してきてその日の放課後、優君が一人でこの海を眺めとった。なんか物寂しい様子で…

「あれ、優君？」
「ん？はやてか…こんな時間にどうしたんだ？」
「なんや、寝つけんでな…そういう優君はどうしたん？」
「久しぶりにこの海が見たくなってな…何せお前らとの思い出の場所だからな、懐かしくなったんだよ」
「そうか…」

堤防に腰掛けてる優君の隣に腰掛ける。こうして見て見ると優君、暫く見らん間に凄くたくましくなっとる…体の大きさとかもやけど、何や大人の雰囲気をかもちだしとる。

「優君…」
「なんだ？」
「うちな、優君が起動六課に来てくれてとても嬉しかったんよ…それまで不安もあったんやけど、優君が来てくれて安心できたんよ」

本当にありがたかった…やっぱり自分の好きな人やからかな…こういう風に思えるんわ…

「そうか、はやて…」
「ゆ、ゆゆ、優君？／／／」

突然、優君が抱きしめてきた。おまけに頭まで撫でてくれとる…

「ど、どないし「はやて…よく今まで頑張って来たな…」…っえ？」

「今まで辛い事がたくさんあったよな…『闇の書事件』で歩くロストロギアと呼ばれ…そんな中でも強く自分の信念を貫ぬいて来たんだよな…ごめんな、隣に居てやれなくて…」
「ううん、そんなことないよ…それに今は隣に居てくれてるしな…」
あかん、こないな事言われたら今まで溜め込んで来た物が…
「だとしても今まで誰にも弱音を吐かずに居たんだろ？俺でいいなら受け止めてやるよ…」
「…ならちょっとだけ胸貸してな…」
その瞬間、大量の涙が出てきた…今まで我慢してきた分が全部…

ーーーーーーーーーーーー

それから暫く泣いた後、ようやく涙が止まった。涙が止まったんはいいけど、けっこう泣いてしまったせいで優君の服が濡れてしもうた…
「ごめんな、服汚してしまって…」
「気にするな。これからはあんまり無茶するなよ？」
「うん、時々こうやって頼らせてもらうわ」
「あぁ…そろそろ戻るとするか」
「そやね…優君！」
「？」
「ありがとな♪」

優君にこの四年の間に何があったかは知らん。変わった所もあるかもしれん。せやけど優君の優しい所は何一つ変わってへんかった…

「今度はうちが受け止めたるからな、優君…」

sideout

next

出張任務？（後書き）

さて、どうだったでしょうか？
ちなみに今回で出張編は終了です。

なんかいい雰囲気になってしまいましたが、ヒロインがはやてに決まった訳ではありません

ではまた次回！

訓練（前書き）

十五話目です

なんか今回はアイリスが真面目になってしまいました

それではどうぞ！

訓練

優ｓｉｄｅ

出張任務から帰ってきた次の日、その日の午前練から俺も教導に加わることになった。それで今はなのはと一緒にティアナの個人訓練を見ている。

「もっとよく、弾の動きを見て！」

「はい！」

今は放たれる弾に対していかに正確に最も有効な弾を撃てるかという基礎練をやっている。基礎中の基礎だがセンターガードにとってはとても重要な訓練だ

「はい、いったん終了！最初に比べるとだいぶ良くなってきたよ」

「はい、ありがとうございます！」

まぁ確かに最初に比べると良くは成っているな…だが基礎練だけやっていてもな…

「優君から何かある？」

「ん？なかなかものに成って来ていると思うぞ。まぁこの練習を続けてもいいとは思うが…そうだな、試しに早打ちでもやってみるか」

両手から魔力を放ち空中に漂わせる。まぁ初めてだから五十発ぐら

いでいいな

「え？ティアナにはまだ早いんじゃ…」

「ものは試しだよ。ティアナ、今から俺が魔力弾を連続で放つから全部撃ち落としてくれ。ちなみに弾道は全部直線的だから」

「はい！」

そう言ってクロスミラージュを構えるティアナ。まぁこれを凌ぐことが出来たら上等だよな

「それじゃあいくぞ」

「お願いします！」

「ファイア」

今まで空中に漂っていた魔力が一斉にティアナに放たれる。

「くっ！！」

十発は難なく撃ち落としたが、二十発ぐらいから焦りが見えはじめた。

それなりに耐えているみたいだが、そろそろ限界か…残り十発程か、十分だな…

「そこまでだ」

「はぁ、はぁ、はぁ」

終わると同時にティアナは膝を着く。まぁこれはかなりの集中力を使うからな、無理もない

「どうだったティアナ、早打ちの感想は？」
「正直、今まで一番疲れました…」
「だろうな、これは一発一発をいかに集中して撃ち落とすことができるかが試されるものだ。最初で四十発も撃ち落とせたら十分だ。もっと自信を持っていいぞ！」
「は、はい！ありがとうございます！」

と返事はしたものの…本人は納得できていないらしいな…確実に力はついているんだが…

「じゃあ俺はスバルを見てくるよ」
「うん、ありがとね優君♪」
「ありがとうございました！」

その場を立ち去りながらアイリスに聞いてみる

（アイリス、お前から見てどうだった？）
（最初にしては良くやった方だと思います。ですが魔力のコントロールがまだ不十分ですね。それにまだ完璧に集中しきれていませんね）
（そうだな、近い内にやらかすかもな…）

ｓｉｄｅｏｕｔ

ティアナｓｉｄｅ

初めて『早打ち』をやってみたけど…全然付いて行けなかった…序盤はいいとしても、中盤はほとんど苦し紛れだった…それにまだ十発ぐらい残ってた…

「なのはさん」
「うん？」
「なのはさんは『早打ち』をやった事あるんですか？」
「あるよ、それもさっきと同じように優君にやってもらったんだ。最初は百発中九十発ぐらいしか出来なかったよ」
「そうなんですか」

百発って…しかもなのはさんはそれが最初って言ってた…私の場合、百発もやったら…やっぱり私みたいな凡人はもっと頑張んなきゃ…

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

今、目の前でヴィータとスバルのぶつかり稽古があっている。正確にはヴィータの攻撃をスバルがプロテクションで防いでいるんだが…あ、スバルが吹き飛ばされた…どうやらプロテクションは壊れていないらしい

「プロテクションだけは丈夫みたいだな。ん？優じゃね～か」

「よう、どんな感じだ？」
「まだまだだな。だが鍛えがいがありそうだ！」
「そうか「あ、優兄～！」…はぁ今は訓練中だぞ」
さっきまで林の中に突っ込んでいたスバルが俺に気づいて近づいてきた。
「おい、スバル。フロントアタッカーがあんなに吹き飛ばされてどうするんだよ」
「うぅぅ…ごめんなさい」
まぁ今の段階なら防ぐので精一杯か…
「もう少し下半身を意識してみろ。そうしたらさっきのも止められるぞ」
「下半身？」
「あぁそうだ。よし俺の攻撃を防いだら合格だ」
右手に魔力を集めて巨大化させる。ちなみにこれで五メートル程の大きさだ
「え？もしかしてそれを防ぐの？」
「あぁそれ以外ないだろ」
「む、無理だよ～」
「うるさい、いくぞ！」
「ちょ、ちょっと、うわあぁぁぁぁぁ」
スバルはさっきまでいた林の中に吸い込まれるようにして飛んでいった

「優、あれはやり過ぎだと思うぞ…」
「いや、あれは俺がただ単にあいつのプロテクションがどんなものか知りたかったからやっただけだ。もちろん受け止められるなんて思ってないさ」
まぁあれだけの固さがあれば今のところは大丈夫だろう
「後は頼むぞ、ヴィータ」
「あぁ任せとけ！」
さてとあとはエリオとキャロのところだが…回避行動ならフェイトだけで十分だろ…時間もあるし、久しぶりにやるか

sideout

なのはside

「皆、集合～！これで午前練は終わりだよ」
「「「「「ありがとうございました！」」」」」
「あれ、優君は？」
皆、集合しているのに優君だけが居ない。集合に気づいていないのかな？でも集合時間は前もって伝えてあるし…

「皆、見てない？」
「いえ、私達は…」
「僕達もです」
「おかしいな～」

優の性格上先に帰るなんて事はあり得ないし…ん～

「ねぇねぇなのは、もしかして優はあれをやってるんじゃない？」
「！そうかもしれないね。それだったら気づかないはずだよ」

なんたってあれは『早打ち』以上の集中力が必要だからね

「なのはさん、あれって何ですか？」
「そっかフォワード陣は知らないんだよね、それじゃあ皆で見に行こうか！」

ーーーーーーーーーーーー

木々が生い茂る林の中心にある開けたスペース、そこに一メートルほど淡緑色のタワーと優君がいた

「やっぱりね」
「あれは何をやってるんですか？」
「あれはね、魔力を一個五センチの小さいクリスタル状にして積み上げているんだよ」
「！？凄い集中力ですね」
「うん、昔は暇がある度にやってたんだよ」

私達がそんなことを話している間にもタワーはどんどん高くなっていく。そしてついにタワーの高さが優君の身長と並んだ。

「ふ～こんなもんか…ん？なんだ皆揃って」
「優君、集合時間過ぎてるよ」
「！？すまない、気づかなかった…」
「ううん、大丈夫だよ。じゃあ皆、これで解散にするね！」

フォワード陣は自分達の部屋に帰って行った。今は私とフェイトちゃんと優君しかいない。ヴィータちゃんは何でもはやてちゃんに呼び出されたらしい

「それにしても相変わらず綺麗だね、このタワー」
「そうか？」
「うん、久しぶりに見たけどやっぱりすごいね」
このままどこかの美術館にでも飾れそうなほど美しいタワー。だけどこの行く先は…

パチン…優君が指を鳴らすと同時にタワーの上部の方から魔力が散っていく。これはこれで綺麗なんだよね

「俺達もそろそろ戻ろう、集中力使ったから腹が減った」
「うん、そうだね。優君、お昼一緒に食べようね♪」
「あ、私も一緒に食べる！」

やった♪これで食べさせ合いができたら…／／／でもフェイトちゃんも一緒みたいだし…

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

訓練所を後にして自分の部屋に戻ろうと廊下を歩いていたら、ティアナがいた。どうやら俺を待っていたらしい

「優さん！」
「どうしたんだ？」
「あの…お願いがありまして」
「お願い？」

お願いね～あらかた自分に稽古をつけて欲しいとかだろうな

「もし良ければ私の自主練を見てくれませんか？」
「自主練？今の訓練だけで十分じゃないのか？」
毎日あんだけやっていて、よくこんな事が言えるな…

「なんだか自分が強くなっているって思えなくて…」
「そうか…少し考えさせてくれ」
「分かりました、それでは失礼します」

あいつがあんなに強さにこだわる理由…恐らくティーダの件だろうな…

（マスター、部隊長から呼び出しですよ）
（そうか…）
（お悩みのようですね？ティアナさんの事ですか？）

（まぁな…これは俺がどうにかする問題じゃないと思うんだよな。
これはあいつら…なのはとティアナの問題だ）
（そうですね、しばらくは放っておいてもいいんじゃないですか？）
（そうだな…）

何事も無ければいいんだけどな…一応、声だけはかけておくか

sideout

next

訓練（後書き）

『早打ち』のイメージは英雄王の『ゲートオブバビロン』です

巨大化した右手は炎髪灼眼の『紅蓮』？のイメージです

次はホテル・アグスタです！

ちなみにこの話は短くして、魔王降臨をメインにします

では

ホテル・アグスタ（前書き）

十六話目です

すいません、かなりグダってしまいました…

それではどうぞ！

ホテル・アグスタ

優side

はやてに呼び出されて聞いた話によるとホテル・アグスタの警備任務があるらしい。そこでは危険性のないロストロギアのオークションが行われるらしい。

「警備任務か～俺達の管轄じゃないと思うんだが…」

「ロストロギアが関与している以上しゃ～ないって」

「そうだな」

ーーーーーーーーーーーーーー

という訳で現在俺達はヘリで移動中だ。ちなみにシグナムとヴィータは先に行っているためここにはいない。あの時呼び出されたのはこれが理由か

「んで俺は何をすればいいんだ？フォワード陣と一緒に外の警備か？」

「ん？それはやな～…」

「シャマル先生、その四つのケースはなんですか？

「これは隊長達の仕事着よ♪」

ーーーーーーーーーーーーー

（それにしても仕事があいつらのエスコートとはな…）
（いいじゃないですか！美人が三人も一緒なんですよ♪）
（はいはい…それよりアイリス。ここからは真面目な話だ。何か知らないが嫌な予感がする…だからいつでも『解放』できるようにしておいてくれ）
（！？…マスターの勘はよく当たりますからね…くれぐれも無理はしないでくださいね）

そうこうしているとドレスに着替えたなのは達がやってきた。
こうして見ると随分大人らしくなったな…貴賓にあふれているというか何というか…

「ん？どうしたんだ三人共、ボーとして？」
「！？な、何でもないよ…（優君のスーツ姿、凄くかっこいい…見惚れちゃった…／／／／）」
「はうぅ…（反則だよ…似合い過ぎてるよ～／／／／）」
「な、何でもないで…（あかん…このまま抱き付いてしましたいわ…／／／／）」

「そうか、それにしても三人共よく似合ってるな。綺麗だよ」
それを聞いた瞬間、三人の顔が真っ赤に染まる。そろそろ受け付けの時間か…

「そ、それじゃあエスコートお願いな♪」
「了解。それでは参りましょうか、お嬢さん方」

ーーーーーーーーーー

会場に入った俺達は打ち合わせ通りに各持ち場に待機している

（マスター、外にガジェット反応です！今、守護騎士達とフォワード陣が応戦しています）

（そうか…）

何もなければいいんだｇ…！？この魔力はティアナか！？馬鹿が…無茶しやがって…

「アイリス、１％解放！」

「了解！」

「フラッシュムーブ！」

ｓｉｄｅｏｕｔ

ティアナｓｉｄｅ

私は証明しなきゃいけないんだ『ランスターの弾丸に貫けない物はない！』って！

「クロスファイアー…シュート！」

弾丸は順調にガジェットを撃ち落として行った。これなら行ける！…そう思った矢先だ

「スバル！！！」

一発の弾丸が逸れてスバルの方に飛んで行った。無情にも弾丸はスバルに当たり爆発した…

しかし煙が晴れるとそこにはスバルを小脇に抱えた優さんがいた…

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

なんとか間に合ったな…くそ、頭痛ぇな…さっそく反動が来やがった

「優兄！？ち、違うんだよ！今のもコンビネーションの内で…」

「少し黙ってろ…」

殺気を交えて言うとスバルは黙り込んだ…さてと…

「おいティアナ！お前は証明するんじゃなかったのか？『ランスターの弾丸に貫けない物はない』と。なら今すべき事を考えて実践しろ！」

「！？は、はい！スバル行くわよ！」

「う、うん！」

これで大丈夫かな…それにしても、相変わらずきついな『解放』は…

ーーーーーーーーーーー

（マスター、大丈夫ですか？）
（まぁな…少し休めば大丈夫だろ）
（そうですか…どうやら戦闘が終わったようです）
（そうか…じゃあ持ち場に戻るか）

どうせこの後なのはとティアナは話すだろうし…そこで一件落着となればいいんだが…

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｎｅｘｔ

ホテル・アグスタ（後書き）

フラッシュムーブ

転移魔法以上の速度で転移。イメージ的には長距離テレポートです

模擬戦（前書き）

十七話目です

前話と同じようにかなりグダってしまいました。

それでは短いですが魔王降臨です。どうぞ！

模擬戦

優ｓｉｄｅ

ホテル・アグスタの一件があって以来、ちょくちょくティアナが自主練をしているのを見かける。今日も例のごとくやっていた

「ヴァイスどうだ、ティアナの奴は？」

「うお！？旦那ですか、驚かさないで下さいよ！」

「すまん、でどうなんだ？」

「四時間ぶっ通しっすね。一応休めとは言ったんっすけど…」

訓練があった後に四時間…しかもそれを毎日…あんなんじゃいつかぶっ倒れるぞ

「そうか…ちょっと話してくるかな」

「お願いします」

近づくと俺に気づいたティアナは一礼するがすぐに自主練に戻ってしまう

「なぁティアナ、少し話さないか？」

「…分かりました」

俺達は置いてあるベンチに腰掛ける。ヴァイスは気を使ったのか校舎に戻って行った

「悪いな、自主練中に」
「いえ、それで何の用ですか？」
何かピリピリしてやがる。まぁ自主練を邪魔されてる訳だしな…
「まずはごめんな、自主練見てやれなくて。以外と副部隊長って仕事が多くてな…」
「い、いえ。気にしないで下さい。私も無理を承知でお願いしたので」
まぁ単刀直入に聞くのもなんだし、余談を挟んでみたが…以外に素直に答えたな…
「そうか、そう言ってもらえると助かるよ…なぁこんな時間まで自主練してるのは何のためなんだ？」
「私みたいな凡人はこれぐらいしないと強くなれないんで…」
自分を凡人って…まぁこんな部隊にいたら、そう思ってもしかたないな…これが原因か…
「そうか…自主練をするなとは言わないが無茶はするなよ。あと時間があったらなのはと話し合ってみろ…何かが見えるかもしれない」
「はい、それじゃ自主練にもどりますね」
今のあいつに何言っても意味がないな…成り行きに任せるか…
「ヴァイス、悪いがティアナを見守ってやってくれないか？」
「うっす！」

はぁ…なのはにも言っておくか…確かこっちだったよな、あいつらの部屋は…

ーーーーーーーーーーーー

えぇ～と…ここだな

「なのは居るか？」

『優君？どうしたの、こんな時間に？』

「ちょっとな…入ってもいいか？」

『うん♪あ、今ドア開けるから』

この部屋に入るのは二回目だが…相変わらず整理整頓されているな

「こんな時間まで訓練メニューを考えているのか？」

「うん、あの子達のためだもん！」

まったく…どんだけワーカーホリックだよ…こいつもいつかぶっ倒れるんじゃないのか…

「そうか、そういえばフェイトは…「なのは～いま上がったよ」…」

目の前には風呂から上がりタオルを一枚巻いたフェイトがいた…いかん、目が合った

「わ、悪い！」

慌てて体を後ろに反らす

「な、なんで優がここに居るのかな？」
「ちょっとなのはに話があってな…」
やばい、気まずいぞ。非常に気まずい…フェイトは着替えに行ったみたいだが…そしたらなのはが話しかけてきた
「それで優君、話って何？」
「あぁそうだったな。なのは、フォワード陣の事どう思っている？」
「どうって…皆いい子達だと思うよ。何事にも真面目だし」
上っ面でしか見てないってことか…それで行き違いの発生といったところか…
「そうか…時間があればあいつらと話し合ってやってくれ。お互いに知る事があるだろうからな」
「う、うん」
「まぁ話っていうのはそんだけだ。そろそろ帰るよ」
俺にできるのはこれぐらいだな…あとはあいつら次第だ…

ーーーーーーーーーーー

そして数日が過ぎ、今日は模擬戦。今はティアナとスバルの番なんだが…
馬鹿かあいつらは…あんな無茶苦茶な動きしやがって…結局話し合ってないのかよ…

（アイリス、いつでもムーブができるようにしておいてくれ）
（了解）
ん？ティアナが砲撃だと？いや、あれはフェイクか…本物は…なのはの真上！？あんなことしたら…
（アイリス、一発目は見逃すが二発目を打つようだったら行くぞ）
（いつでもどうぞ！）
結局こうなっちまうのかよ…

ｓｉｄｅｏｕｔ

なのはｓｉｄｅ

ティアナに二発目を打ったはずなんだけど…煙が晴れるとそこにはティアナを小脇に抱えた優君がいた
「何で邪魔するのかな、優君？」
「…おいスバル、ティアナを医務室に連れていけ…」
いつの間にか私がかけたバインドが解かれている
「優君も頭冷やそうか…クロスファイア…シュート」

煙が晴れるとただ優君が立っていた。さっきの攻撃を防御した様子もない

「これがお前の教導か？」

「そうだよ…」

「違うな、こんなのは教導とは言わない…単なる暴力だ…」

うるさい…

「優君に何が分かるの…」

「自分の教導の意味も言わない奴の何が分かると言うんだ？」

そう言って近づいてくる優君

「うるさい…シュート」

確か弾は当っているのに…尚も近づいてくる

「…言ったはずだ、話し合えって…お互い知る事があるって…話し合わなかった結果がこれか？」

「くっ…シュート！」

何で？何で倒れないの…生身でしかも五発以上打ってるのに…

遂に私の前まで来た…怖い…そう思ってたまらず目を詰った…だけどそんな私を優君は抱きしめた

「話し合わないと伝わらないこともあるんだよ…とくにあの年頃だと尚更な…後で話し合ってやれよ？」

「…ご、ごめんなさい…」

たまらず泣き出した私を優君は頭を撫でながら抱きしめてくれた

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

はぁ～模擬戦も中止になったしこれで一件落着だな…

部屋に戻ろうとしたら…ヴィータがなんかすっごい形相で俺を睨んでいる

「おい…大丈夫なのかよ？」

「何がだ？」

「惚けなよ！バリアジャケットも着ないで、なのはの攻撃をあんなに食らったんだぞ！つーかなんで立っていられるんだよ？」

普通に考えたらそうだよな…まぁ俺は普通じゃないんだが…

「大丈夫だ、仕事に支障はきたさない。だから気にすんな」

「…分かった…」

以外にあっさりと引いてくれたな…まぁこちらとしては助かるがな…

（アイリス、どんな感じだ？）

（整体維持機能７０％、完全回復まで二、三日かかりますが日常生

活には問題ありません）
（そうか、部屋に戻ったら寝るよ。何かあったら起こしてくれ）
（はい）
さて戻るとするか

ーーーーーーーーーーー

「マ……ー…」
ん？何か聞こえる
「マ…ター…」
うるさいなぁ
「マスター、いい加減に起きて下さい！仕事ですよ！」
「ん？あぁ悪い悪い…で何だ？」
どうも頭が回らないな…寝過ぎたか？かれこれ五時間ぐらい寝ていたみたいだ
「ガジェットです。どうやらこちらの戦略を調べに来たらしいです」
「そうか…」
遅れてるかもしれないけど一応行くか…

ーーーーーーーーーーーー

アイリスに起こされてヘリポートに来たが…何やってんだかこいつらは…

シグナムがティアナを殴ろうとするが、間に割り込んでその拳を止める

ちょっと締めか…

「何の真似ｄ…

「おいおい、任務中に私語とは…お前らどこに勤めているのか理解しているのか？」

その場にいる全員が押し黙る…まぁこんだけ殺気を放っていたら仕方ないか

「ガジェット追撃には俺一人で行く。お前らは全員、待機していろ。行くぞヴァイス！」

「うっす！」

（なのは、あいつらに話してやれよ）

（え？…う、うん！）

さてとこれでホントに一件落着だな…さっさと終わらせますか…

ｓｉｄｅｏｕｔ

ティアナside

あの後、私達はなのはさんの過去と教導の意味を聞いた。それで自分達の事をいかに考えていてくれたかを知った。なのはさんには謝ったけど、もう一人謝らないといけない人がいる

「ここに居たんですか…」
「ん？ティアナか」

優さんは屋上で月を眺めていた

「なのはと話し合えたか？」
「はい、それと…すみませんでした。私の事、気遣って頂いてたのに…」
「まぁ気にすんな。若い内は色々と学ぶもんだよ」

そう言って優さんは頭を撫でてくれる…優しいな～この人は…

「あ、あの優さん！」
「なんだ？」
「えっと…その…に、兄さんって呼んでもいいですか？」
「？こんな俺でいいなら、いいぞ」
「はい！」

そして兄さんの腕に抱きつく。最初は兄さんもためらっていたけど、部屋に戻るまでずっと離れないでいてくれた

こうして私にとって激動の一日は幕を下ろした

sideout

next

模擬戦（後書き）

次話からは
少しオリジナルストーリー
でいきます

思い出（前書き）

十八話目です

学校が始まって書く時間が…

ぼちぼち頑張って書きます

それではどうぞ！

思い出

スバルｓｉｄｅ

午前練が終わって、私達フォワード陣はなのはさん達とお昼ご飯を食べていた

「なのはさん、昔の優兄ってどんな感じだったんですか？」

「そうだな～最初に見たときは、なんだか一匹狼って感じがしたかな。他の人を近づくけないような雰囲気だったよ」

「転入して来た時はちょっと怖かったよね…しかも私達の席の真横だったし…」

へぇ以外だな～あんなに優しい優兄が一匹狼だなんて…

「思い出話、聞かせてくれませんか？」

「どこから話そうかな…私達が中学二年のときに優君が引越して来たんだ…」

ーーーーーーーーーーーー

「ねぇねぇフェイトちゃん、はやてちゃん！今日からこのクラスに転入生が来るんだって！」

「え？そうなんだ…どんな人なんだろう…」

「せやからこの席が空いとんや」

私達の席は教室の一番端を囲むような位置にある。そしてその一番端にあるが転入生が使うことになるだろう席だ

「は～い皆、席について！朝のＨＲ始めるわよ。それでは今日は転入生の紹介からします。入っていいわよ！」

先生が言うと教室のドアを開けて一人の男の子が入ってきた。身長は１７０？ぐらいで髪は銀髪で目は紅色…なんとも言えないけど他人を寄せ付けない雰囲気がした

「じゃあ自己紹介、お願いね」

「如月優です。仕事の関係上、ここに引越して来ました。宜しくお願いします」

「席はあそこだから。それじゃあＨＲ始めるわよ」

彼は自己紹介をすぐに済ませると、私達の隣の空いている席に座った。

ちょっと怖そうな人だけど…

午前中の授業が終わって昼休みになった。そこで彼に声をかけてみようとしたんだけど…すぐさま教室を出て行った

それからも声をかけれずに、放課後となってしまった

「なんか不思議な人だね…休み時間はずっと机で寝てるし…」

「うん、結局話せなかった…」

「なんや一匹狼みたいやったな…」

そんな事を言いながら帰っていると…寂し気な様子で夕焼けに染まった海を眺めている彼がいた

「ねぇあれ…」

「うん、なんか寂しそうだね…」

「ちょっと声をかけてみよか」

私達は少し遠慮しながら彼に近づいた。しかし気づかれないかと思っていたら、あっさりと気づかれた

「何か用か？」

「え？えっと…私、高町なのは。よろしくね！」

「私はフェイト・T・ハラオウン。仲良くしてくれたら嬉しいな…」

「うちは八神はやてや！よろしくな！」

「朝も言ったが、如月優だ。それで何か用か？」

以外にもちゃんと返事をしてくれた。悪い人ではないみたい…

（どうする？話す事、思い付かないよ…）

（とりあえず世間話で時間稼ぐからフェイトちゃん、その間に考えといてな！）

（え？私が？）

「ちょっと親睦を深めよう思ってな。質問してええか？」

「別に構わないぞ」

「そうか！なら仕事の関係って親は何の仕事しとんの？」

「俺に両親はいないぞ、ものごころついたときからな…仕事に関しては、まぁいずれ分かるさ」

親がいないって…ということは自分で働いているんだ…

「そうなんや…ごめんな、いらん事聞いて…」

「気にするな」

いづれ分かるって事は私達も知っている職業かな？まさか管理局だったりしてね…

（あかん、空気が重なってしもた…フェイトちゃん、あとは任せるで！）

（ち、ちょっとはやて～…）

「あの…よ、良かったら今晩、皆で食べない？」

（もっと他に無かったんか！？いきなり食事やなんて…）

（だ、だって思い付かなかったんだもん…）

「すまないが遠慮しとくよ…帰って荷物の整理とかもあるからな…」

「そうなんだ…」

「あぁ悪いな」

そう言って彼は帰ってしまった。でも以外といい人そうだったな…

「なのは、どうしたの？ボーとして？」

「以外といい人だな～って思って」

「せやね、これから仲良くできたらいいな」

ーーーーーーーーー

「そんな出会い方だったんですか～なんか珍しい出会い方ですね」
「うん、でもその次の日にちょっとした事件があったんだ」
「事件ですか？」
「優君が転入してきて次の日、私達が学校から帰っている途中に三人の男の人にナンパされたんだ…」

ーーーーーーーーーーーー

「君達、かわいいね！俺達と遊びに行かない？」
「やめてください！」
「そんな連れない事言うなよ～」
（どうしよう、魔法を使うわけにもいかないし…）
（このままもいややし…）
「なぁ～って…」
「お兄さん方、学生に手出すなんて犯罪者予備軍だぞ」
私達が困っていると、男達の奥側に…彼がいた。どうやら学校から帰る途中らしい

「あぁん？なんだお前、正義のヒーロー気取りか？」
「別にそんなつもりはない。ただお前らみたいな奴が俺の視界にいて邪魔なだけだ」
「んだとガキが！！！」
彼の一言にキレた男が一人、彼に殴りかかった。だけど男の拳は簡単に避けられ、逆にその顔を殴られた。殴られた勢いで男はそのままごみ置き場に突っ込んだ
「調子に乗んなぁ！」
二人目の男も殴りかかるが、鳩尾を殴られその場に倒れ込む
「おい、小僧、あんまりふざけてると殺っちまうぞ！」
そう言って三人目の男は懐から折り畳み式のナイフを取り出した。
「お前なんかじゃ殺れないよ」
「ふざけんなぁ！！！」
男はナイフを突き出すようにして突進した。だけど彼はそれを避けずあろうことかナイフを左手で受け止める。もちろんナイフの刃は左手を貫通している
「逃がさねぇぞ」
貫通したナイフごと男の手を握りしめ、右手だけで男をボコボコにした。十回ぐらい殴ると手を離しナイフを抜きながら男達に訊ねた

「まだやるか？」

「「「ごめんなさい～」」」

男達は脱兎のごとく逃げ出した。そんな男達を見ながら彼はため息をつき、左手に布を巻きつけていた

「大丈夫か、三人共？」

「うん…ってあなたの方が大丈夫なの？」

「ほっときゃ治るさ」

「いやいや、そんな訳ないやろ！」

「そうだよ、病院に行かなくちゃ…そうだ母さんに連絡して…」

「大丈夫だって、それじゃあ用があるから」

今度は彼が脱兎のごとく逃げて行った。そんな彼の後ろ姿を見て、私達は心に決めた

「ねぇ二人共、明日彼と…」

「そうだね…」

「うちもそのつもりや…」

「「「お話しなくちゃ！」」」

ーーーーーーーーーーーー

翌日の昼休み…

「こんなところに居ったんか。探したで～如月君！」

「ん？どうしたんだ三人共？」

彼は一人屋上でフェンスに寄りかかりながら売店のパンを食べていた

「お昼ご飯、一緒に食べていい？」

「別にいいぞ」

そう言って彼はさっきと同じように黙々とパンを食べる。まるで私達がいないかのように…

「それで…昨日は助けてくれてありがとう」

「まぁ気にするな。困ったときはお互い様ってやつだ」

「それと…ごめんなさい…私達のせいで怪我させちゃって…」

彼の左手には包帯が巻かれていた。だが彼はそれを気にする様子もない

「別にお前達のせいじゃないさ…それにたいした怪我でもないしな」

左手をナイフで貫通されて、たいした怪我じゃないって…そうしている内に彼はパンを食べ終えてしまった

「じゃあ俺は行くよ、昼飯も食い終わったしな。またな高町、ハラオウン、八神」

彼はゴミを持って屋上の入口に行ってしまう

「あっ待って！」

「なんだ？」

「えっと…これからは名前で読んでくれないかな…なのはって」

「私もフェイトって呼んで欲しいな…」

「うちもはやてって呼んで欲しいわ…」

「…分かった…授業遅れんなよなのは、フェイト、はやて」

ーーーーーーーーー

「その日以来、よく一緒に話したり遊んだりしたんだ」

「そうなんですか～だからあんなに仲がいいんですね」

「そうだね。あっもうこんな時間！？皆そろそろ午後の訓練の時間だよ」

「!?ほらスバル、はやく行くわよ!」

「う、うん!」

優兄のこと少しだけだけど知る事ができた…今度は直接聞いてみよ♪

sideout

next

思い出（後書き）

過去編でした

オリジナルだったので

かなりグダった感があります…

息抜き？（前書き）

十九話目です

今回から三話ほど
オリジナルでいきます

来週から修学旅行なので
更新が…

それではどうぞ！

息抜き？

なのはｓｉｄｅ

「…今日はお休み？」

「うん、なんかうちら隊長陣が以上に働きすぎているからってロングアーチの連中が言っててな…流石に一気に休まれたら困るから今日はなのはちゃん、明日はフェイトちゃん、明後日はうちが休みを取ることになっとる」

「そうなんだ…」

朝からはやてちゃんに呼ばれて何かと思ったけど…でもいきなり休みって言われてもなぁ…

「外出の許可も出しとくから、自由にしてええよ！」

「うん、ありがとう」

ん～何しようかな…一人でショッピングに行くのもなんだし…あっそうだ！

『どうしたんだ、なのは？』

「あのね、はやてちゃんからお休みもらったんだ。
だからショッピングに行こうと思うんだけど…優君も一緒に行かない？」
『俺は勤務中だぞ？』
「むむむ…それなら隊長補佐として私のボディーガード！これならいいでしょ？」
我ながらうまい言い訳が思いついたの…これならはやてちゃんに何言われても大丈夫！
『分かったよ…三十分後に校舎前でいいか？』
「うん♪じゃあまた後で！」
やった♪二人だけで出かけるなんてすごく久しぶりだなぁ～しっかりと楽しまなきゃ！

ｓｉｄｅｏｕｔ

優ｓｉｄｅ

いつものようにデスクワークをやっているとなのはから通信がきた。

それはそうと副部隊長ってデスクワーク多いよな…

「どうしたんだ、なのは？」

『あのね、はやてちゃんからお休みもらったんだ。だからショッピングに行こうと思うんだけど…優君も一緒に行かない？』

おいおい…今デスクワークをやっている俺に言うなよ

「俺は勤務中だぞ？」

『むむむ…それなら隊長補佐として私のボディーガード！これならいいでしょ？』

こんな場面で使うもんじゃないだろ！？…どうせこれ以上、何言っても聞かないんだろうな…

「分かったよ…三十分後に校舎前でいいか？」

『うん♪じゃあまた後で！』

はぁこれで一日潰れるな…デスクワークどうしようか…

（いいじゃないですか、なのはさんとデートですよ♪）

（…そうだな、これも仕事のひとつだしな…）

外出なんて久しぶりだな…二年ぶりになるのか…

ーーーーーーーーーーー

デスクワークを早めに切り上げて、今は校舎前でなのはを待っている。ちなみに言うまでもないが制服じゃなく私服を着ている。

しばらく待っていると私服姿のなのはがやって来た

「ごめ～ん、待たせちゃった？」

「いや、俺もさっき来たばかりだよ」

実際は十分前に来たんだがな…まぁどうでもいいか…

「じゃあ行こうか」

「うん♪」

…なんかお決まりのように腕を組まれる…まったく、周りの目を気にしないんだろうか…

ーーーーーーーーーー

午前中の内にクラナガンの町に着いた俺達はショッピングモールを見回っている。ちなみに昼飯はすでにファミレスで食べ終えている

「どこに行く？」

「う～ん…あそこ服屋に行かない？前に見た雑誌に載ってたんだ」

「じゃあそこにするか」

なるほど流石は雑誌に載るほどの店だ。店の雰囲気もいいし、かなりの種類の服が売られている。まぁ女性向けの服屋だからよく分かんないが…

「優君！どう似合ってる？」

「あぁ似合ってるよ」

そこには『管理局のエース』ではなく、ただ純粋にショッピングを楽しむ女の子…目をキラキラと輝かせたなのはがいた

「優く～ん！ちょっとこっちに来て～！」

「はいはい、今行きますよ」

普段からこんな感じでいられたらいいんだけどな…管理局に勤めている以上、そういう訳にもいかないよな…今日だけでも楽しませてやりたいな

ーーーーーーーーーー

あれから二時間後に俺達はあの店をあとにした。その間、なのはずっと楽しそうだった

「ふぅ～いっぱい買っちゃった♪」

「…そうだな…」

現在、俺が持たされている袋の数…計六個！おかげで両腕が塞がっている。よくもまぁこんなに買えるよな…俺も何か買って行くとするか

「なのは、そこのケーキ屋に寄っていいか？」

「うん、いいけど…どうして？」

「六課の皆のお土産に何か買って行こうと思ってな」

皆は働いていて俺達だけ休むってのは気が引けるからな…せめてお土産だけでも買って帰らないとな

「いらっしゃいませ～」

「すみません、適当に三十個ぐらいお願いします。あと別にショートケーキを一つお願いします」

「分かりました」

合計金額は…１５５００円…ケーキだけでこの値段かよ…まぁ一個あたり５００円って考えれば妥当だな。しばらくすると店員が箱の入った袋を持ってきた

「ありがとうございました～」

以外と重いな…これにあの袋まで運ばないといけないとは…男は損な生き物だよな…

「お帰り、すごい量だね…」

「まぁこれだけあれば足りるだろ。あとこれ」

なのはにさっき別に買ったショートケーキの入った箱を渡す

「皆だけだと不公平だからな、ショートケーキで良かったか？」

「うん、ありがとう！」

なのはがケーキを食べ終えた後二時間ほど店を見てまわり、ショッピングモールをあとにした

ーーーーーーーーー

現在時刻１８：００

今は帰り道の途中にある公園のベンチで一休みしている

「ごめんね、付き合わせちゃって…」

「謝らなくていいよ、俺はなのはが楽しめたならそれで十分さ」

「優君…／／／」

誰にでも息抜きは必要だからな…特にワーカーホリックならなおさらだ…

「そろそろ行こうか、あまり遅くなってもいけないし」

「うん…ねぇ優君、私ね…」

「ん？」

「な、何でもないよ！？」

「そうか…」

そのときなのはは何故か顔を紅らめていたんだが…

結局、帰り着いたのは１８：３０

食堂で買ってきたケーキを皆に渡したんだが…そこは一時的に戦場とかしていた

ｓｉｄｅｏｕｔ

ｎｅｘｔ

息抜き？（後書き）

いかがでしたか？

デートとか言っておきながら
あまり絡みがないですね…

ではまた次回

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0251z/

魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

2012年1月14日23時51分発行